

青年期用価値とコミットメント尺度の研究 (2) —下位尺度得点のパターンから見た各世代の特徴—

○下田芳幸 (佐賀大学)
石津憲一郎 (富山大学)

大月 友# (早稲田大学)

キーワード：アクセプタンス&コミットメントセラピー, 価値, 世代間比較

目 的

研究(1)で作成された青年期用価値とコミットメント尺度 (Value Of Young AGE scale; VOYAGE) の基礎的資料を得るため, 各世代の特徴について, 下位尺度の得点パターンから検討する。

方 法

調査対象者 研究(1)と同じ中学生559名, 高校生176名, 大学生153名の計888名

調査内容 研究(1)で作成された VOYAGE14項目 [“価値の明確化とコミットメント”(価値) 9項目, “回避の持続”(回避) 5項目]

手続き 中学生・高校生は協力の得られた学校にて帰りの会等の時間帯に, 大学生は大学の授業終了後, 質問紙への回答を求めた。いずれも回答は任意であった。

結果と考察

VOYAGE 下位尺度の得点パターンの類似性でグルーピングするため, 潜在プロファイル分析を行った。分析には HAD15.006 (清水, 2016) と Mplus7.4 (Muthén & Muthén, 1998-2016) を用いた。

情報量基準 (BIC), エントロピー, 各潜在クラスへの所属確率を総合的に検討した結果, 潜在クラス数は4が最も妥当と判断された (fig. 参照)。クラス数4でのエントロピーは.79, 各潜在クラスへの所属確率は85.4-91.1%であった。

各クラスの特徴を検討するため, 各下位尺度得点を従属変数, 潜在クラスを独立変数とする1要因分散分析を行ったところ, いずれも主効果が有意であった (価値: $F(3, 884)=28.70$, 偏 $\eta^2=.09$, 回避: $F(3, 884)=2226.88$, 偏 $\eta^2=.88$, $ps<.05$)。Holm 法による多重比較の結果, 価値ではクラス1>クラス2, クラス3, クラス4であった (Hedges's $g=.13-.96$, $ps<.05$), 回避ではクラス1<クラス2<クラス3<クラス4 ($ps<.05$, $g=3.21-10.71$) であった。よって, クラス1 ($n=343$, 38.6%) は価値高・回避低, クラス2 ($n=377$, 42.5%) は価値平均・回避やや低, クラス3 ($n=142$, 16.0%) は価値平均・回避やや高, クラス4 ($n=26$, 2.93%) は価値平均・回避高のクラスと解釈できる。

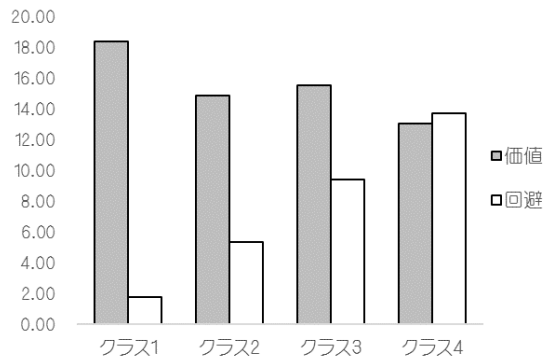


fig. 各クラスの下位尺度の特徴

“価値の明確化とコミットメント”はクラス2～4で差異が示されず, クラス1との差の効果量も大きくない一方, “回避の持続”は各クラス間の差が有意で効果量も大きかった。よって今回得られた4クラスは, 特に回避の持続の違いで特徴づけられているといえる。中学生～大学生は, 発達段階としてアイデンティティの形成が中心課題であるため (Erikson, 1959), 自身の価値の明確化とコミットメントは概ね強く自覚される一方, それらは形成途上であるために, 挫折的体験による回避的行動の取りやすさの違いが, 個人間で顕著なのかもしれない。

続いて, 各クラスの世代ごとの違いを検討するため, 各クラスに所属する可能性が高い各世代の人数について, カイ二乗検定を行った。その結果, 人数の偏りが有意であり ($\chi^2(6)=14.90$, $p<.05$ Cramer's $V=.092$), 各度数の期待値に対して, 中学生のクラス1は多く, また高校生のクラス1が少なく, クラス3が多かった。中学生は主観的に, 自分が大事にしたい価値は明確であり, その価値に沿った行動から回避していないと思っている一方, 高校生はそのような自覚のある生徒の割合が減り, 回避的な行動を継続的に取る割合が増えるようである。高校進学における将来を意識した選択や, 高校受験の体験が, こういった世代間の違いに影響しているのかもしれない, このような世代間の差の形成要因の検討が今後の課題である。

本研究は, 日本学術振興会科学研究費助成事業の助成 (課題番号26380875) を受けて行われた。